

ミソサザイ 英: Eurasian Wren 学: *Troglodytes troglodytes*

1. 分類と形態

分類: スズメ目ミソサザイ科

ミソサザイ類はスズメ目ミソサザイ科ミソサザイ属の鳥で、その仲間は世界で19属85種いるとされる(Gill & Donsker 2016)。これらのうち、ほとんどの種は北米と南米大陸に分布するが、旧北区のユーラシア大陸に1種だけ分布するのがミソサザイである。従来の分類では、旧北区と新北区(北米)の個体群が同種とされていたが、最近の分子系統解析の研究から分類が見直され、別種に分けられた(Drovetski et al. 2004)。日本に分布する種もこの種である。ミソサザイは、ユーラシア大陸のヨーロッパから日本を含む極東域まで広く分布しているため、29もの亜種がいるといわれている(Gill & Donsker 2016)。日本国内には、以前は7亜種いるとされていたが(山階 1941)、現在の日本鳥類目録改訂第7版では北海道から九州に分布する亜種ミソサザイ *fumigatus*、伊豆諸島中部以南に分布するモスケミソサザイ *mosukei*、屋久島、種子島に分布するオガワミソサザイ *ogawae*、大東諸島で絶滅したとされるダイトウミソサザイ *orii* の4亜種が認められている(日本鳥学会 2012)。

形態:

全長が約10cmでキクイタダキと並んで、国内の最も小型な種の一つである。オスとメスの体格差は小さいが、わずかに雄の方が大きい。尾はピンと上に上げているのがこの鳥の特徴的な姿勢であるが、繁殖期のオスはメスの前でこの尾を上下に動かし、時には扇のように開いたりもするディスプレイを行う(中村・中村 1995)。

全長:	99-109mm	翼長:	45-53mm
尾長:	33-37mm	嘴峰長:	11-13mm
ふしよ長:	17-19mm	体重:	6.8-10.9g

※雌雄を含めた測定値。榎本(1941)による。

羽色:

雌雄同色。横縞のある全身褐色の羽色をしており、とても地味である(図1)。



図1 ミソサザイ (撮影: 三木敏史)

鳴き声:

小さな体に似合わず、雄はトリル(震わせた声)を効かせたとても複雑で長く、音量のある声でさえずる。まだ雪深い亜高山帯でも3月頃からさえずり始め、8月まで聞くことができる。地鳴きは、チャツ、チャツとウグイスの地鳴きに似た声を出す。

2. 分布と生息環境

分布:

旧北区のユーラシア大陸に広く分布する。日本国内では、北は千島列島南部から北海道を経て、南は屋久島までの広い範囲で繁殖する。標高の高い場所で繁殖していた個体は冬期になると低地に降りる。

繁殖地の環境:

低山帯から亜高山帯の針葉樹林や針広混交林の、林床がじめじめと苔むした場所を好んで生息する。また、流れの強い溪流沿いでも繁殖する(図2)。



図2 溪流沿いの繁殖場所。滝のすぐ横の岩棚の下に巣があった(撮影: 山梨県清里町)。

3. 生活史

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12月
非繁殖期			繁殖期			非繁殖期					

繁殖システム:

配偶システムは一夫一妻かまたは一夫多妻。最多で一夫四妻までであることが羽田・小堺(1971)の志賀高原の亜高山帯針葉樹林帯で行われた研究で報告されている。その内訳は、1969~1971年の3年間で、一夫四妻(1例)、一夫三妻(1例)、一夫二妻(3例)、一夫一妻(4例)、単独(4例)であった。

また、つがった雌の数とオスの行動圏には正の相関関係があり、つがうメスが増える毎に、オスは行動圏を拡張させていくことが明らかとなっている(羽田・小堺 1971)。その他、このミソサザイの一夫多妻の配偶システムについては、社会的なつがい関係が遺伝的なつがい関係と一致するのかどうかは、未だ確かめられていない。この疑問を解決するには、巣内ヒナの父性を調べる遺伝解析が必要とされ、今後の課題であるといえる。

巣:

ミソサザイのオスは、球形の特徴的な巣を造る(図3)。繁殖期のオスは、枯れ枝と苔を編んだ精巧な巣を自分の縄張り内の突き出た岩棚の下や浮き上がった樹木の根の裏側に造る。オスは巣内(産座などの卵に直接触れる部分)を除いた外側を造り、これを求愛巣という。オスは普通、2~4巣の外巣を造るが、8巣も造った個体もいる(羽田・小堺 1971)。この求愛巣の周りで雄は激しくさえずり、メスを呼び込む。メスは巣を気に入ると内巣を造り、産卵する。巣の大きさは、外径が9~15cm、奥行9cm位、出入り口の直径は、2.7~4.5cm、内部の深さは、5~12cm位である(清棲 1965)。メスは、オスが造った外巣を気に入ると、羽毛や獣毛、草木の細根などを運び入れて内巣を造る。

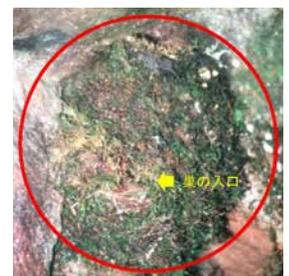


図3. ミソサザイの巣。赤丸内がミソサザイの巣の全体。黄色い矢印で示した場所が巣の入口。

卵:

一腹卵数は3~6卵。卵色は白色であるが、白色の地に小さい斑点が散在する場合もある。形は一般的な卵形で、長径16.5~18.2mm、短径12.1~14mm、卵重は1.0~1.5gである。

抱卵, 育雛期間:

メスのみが抱卵する。ヒナは約14~15日で孵化し, 16~17日ほどで巣立つ。

4. 食性と採食行動

暗い樹林の林床で採食し, 樹木の根元や岩に生えたコケの上を跳ねていきながら, 餌を探す。昆虫類を主食とし, 甲虫類(ゴミムシ, コメツキムシ等), チョウ目(シャクトリガ等), ハエ目(ハエの卵等)を食べる。また, クモの仲間も好んで採餌する。

5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題**● 騒音とさえずりとの関係**

植田(2013)は, 沢の近くで雑音が多い場所(沢)でさえずる個体と, そうでない普通の森林地帯の場所(山)の個体のさえずりの特性について調べた。その結果, 沢の個体は, 山の個体と比べて大きな声でさえずり(音圧が高い), 最低周波数が高く, 音要素の周波数変調が少ない(単調な歌)ことが分かった。沢の近くでは, 沢音がさえずりの邪魔をするので, それに負けないよう, 大きな声でさえずり, 沢音の周波数帯と被らないよう, 最低周波数が高くなっていると考えられる。一方, 山の個体のさえずりは, 沢音が邪魔しないので, それほど大きな声でさえずる必要がなく, 音要素の周波数変調が多い(つまり複雑な歌)さえずりを持つことができると考えられた。ただ, 山の個体ではそれらの結果の例外もあり, エゾハルゼミの声が騒がしい青木ヶ原では, 山の個体であっても, 音圧が高い傾向にあった。これは, エゾハルゼミの声が沢音と同じように, ミソサザイにとっての「騒音」として作用したため, 大きな声でさえずっていると考えられた。このように, 環境音が与える野鳥のさえずりの特性の変化は, 他の種でも報告されているが, ミソサザイにおいても似たような現象がみられるのは興味深い。

● ミソサザイとヤマネ

筆者が大学院生だった頃, 山梨県の清里町というところでミソサザイの繁殖生態の調査をしていた時のこと。ある日いつも調査している溪谷で, ミソサザイが現在使っていない古巣を見つけた。その巣に手をいれて中を調べてみると, なんと, ヤマネの子供が沢山入っていたのだ。ミソサザイの古巣を他の小動物が子育ての場所として利用していたのは, 興味深い発見であった。

● 冬季の分布域

冬季の分布域においては, 最近, 興味深いデータが発表された。環境省の自然環境保全基礎調査(1988年)と重要生態系監視地域モニタリング推進事業(モニタリングサイト1000)のデータによると, 1988年の調査では, 越冬期においては北海道では南部でしか分布が確認されなかったのに対し, 2008~2012年のデータをみると, 北海道の広い地域において, 越冬が確認され, 観察地点が増加していたのである(環境省自然環境局 2015)(図4)。この理

由は明らかではないが, 今後, 繁殖期, 越冬期共に, 同種の分布の変化については, 注視していく必要がある。

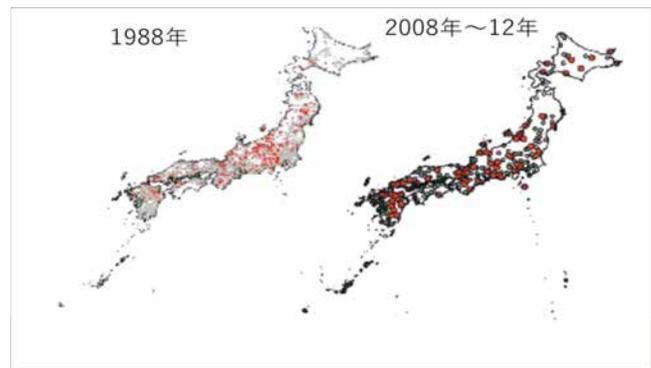


図4. ミソサザイの分布変化(越冬期)。赤: 確認地点。灰色: 調査したが、確認できなかった地点(環境省自然環境局 2015)。

6. 引用・参考文献

- Drovetski SV, Sergei VD, Robert MZ, Sievert R, Igor VF, Evgeniy VN, Igor K, Evgeniy AK & Yaroslav AR (2004) Complex biogeographic history of a Holarctic passerine. Proc. R. Soc. Lond. B 271: 545-551.
- 榎本佳樹 (1941) 野鳥便覧. 日本野鳥の会大阪支部.
- Gill F & Donsker D (Eds). 2016. IOC World Bird List (v 6.2). Doi 10.14344/IOC.ML.6.2. <http://www.worldbirdnames.org/>
- 羽田健三・小堀則夫 (1971) ミソサザイの一夫多妻について。羽田健三(編)鳥類の生活史, pp. 882-894. 築地書館, 東京.
- 環境省自然環境局 生物多様性センター(2015) 重要生態系監視地域モニタリング推進事業(モニタリングサイト1000)森林・草原調査 第2期とりまとめ解析報告書.p.86. 環境省自然環境局 生物多様性センター, 富士吉田市.
- 清棲幸保 (1965) 増補新改訂版日本鳥類大図鑑 I. 講談社, 東京.
- 中村登流・中村雅彦 (1995) 原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>. 保育社, 大阪.
- 日本鳥学会(2012)日本鳥類目録改訂第7版. 日本鳥学会, 三田.
- 植田睦之 (2013) 大きな声で鳴く沢のミソサザイと小さな複雑な声で鳴く山のミソサザイ~ミソサザイのさえずりへの騒音の影響~. Bird Research 9: 23-28.
- 山階芳麿 (1941) 日本の鳥類と其生態 第二巻. 岩波書店, 東京.

執筆者

齋藤 武馬 公益財団法人山階鳥類研究所

大学院修士課程の前半期にミソサザイの繁殖生態をテーマとして研究するも, 途中で挫折。その後, メボソムシクイの系統地理の研究にテーマを変更。そのため, ぜひ, 誰かミソサザイの繁殖生態について, 本腰を入れて研究をして欲しいと願っている。現在は山階鳥類研究所の研究者として, 様々な種の遺伝解析に取り組む。北と南方面のどちらのフィールドも好きなので, どちらに行こうか決めかねている, 今日この頃である。

